聖丘を望みて

高山しのぶ

いにしへ聖父の睦びし丘
そよふく風もなだらかに
尾崎に咲ける山櫻
散れるを見たまふ。聖父の思ひやも、
あはれ氣高く深かりし。
星も移りて月も亦。變り行くなる春と秋
偲ぶに充てるよしがなり
學びのはやし文の窓
我はたのしくひもときし
思出多きわが机
別れてわれは塵の里
過ぎにし、五とせ、
おゝ沉湘のごと時は流れ逝き
返さんすべもならなくに
顧望の巷に低徊し思ひはいとゞ痛まれて
落涙はせきあへず
胸に秘めてたゞ一言
聖父の膝にすがりつき
安からしめよと祈るわれ

編輯の後に

大正十二年は如何に忘れやうとしても忘れる事の出來ない深い印象を吾人の腦裏に刻み込んだ年であつた。そして其の印象は永久に吾人の意識中に把住せられ常恒に識閾の上下に浮沈して再生せずには居ない。

五十年以來我國民が熱血を搾り東西文明の粹を集めて建設した華やかな帝都、それが一朝一夕にして往昔の武藏野に歸らうとは吾人の想像だも許さぬ所で有つた、吾人々類に取つて是程の無常是程の凄慘が復とあらうか。昨日迄晝を欺く銀座の街頭に文明の酒を漁りつつ戯れ廻つてゐた人々が、今日は鳥一つだも飛ばぬ廢墟に親子兄弟の白骨を踏みしめながら悲嘆の涙に日を送らねばならぬ身の上となつた、人生に取つて是程の悲痛是程の酸鼻が復と有らうか。薄紙一枚を距てた外、現在の瞬間を隔てた後は全く闇黑の世界として永久に不可知界である淺ましい人間、それが、どうして大自然に對抗し大自然を制服